森林再生へログハウス造り

Topics

真田さんが語る

檜原フジの森

間伐材の有効利用に取り組む檜原村のNPOフジの森（清水久巳理事長）は2日、間伐材を使ったログハウスを造ろう、という「フジの森・教育の森天然乾燥プロジェクト」の第4回講座を檜原村南郷のフジの森で行った。

地球温暖化防止に向けた森づくりを目指す同プロジェクトは、市民参加で人工林の間伐を促進し、その間伐材を使って、間伐材そのものを天然乾燥するための建屋を造ろうというもの。プログラムはすでに昨年12月からスタートし、フジの森会員の真田勉さんが講師となり間伐材利用や森づくりの講話や間伐作業などを重ねている。

真田さんは参加者を前に「東京の森づくり」と題して講話＝写真下。「東京の森林は約7万9千㌶で多摩地区は5万3千㌶。そのうちの6割が人工林で戦後植林された森が9割」と講和を開始。檜原村が主に燃料としての炭を産出していたという歴史を説明した。そして「燃料革命や外材の輸入、材価の下落、さらに雪害などが重なり、植林した森も間伐されなくなり、放置されたままになっている」と山の現状を分析した。

東京都でも1985（昭和60）年代から補助金制度を設けて間伐促進に乗り出す一方、最近は花粉症対策として従来の100分の1といわれる花粉の少ないスギやヒノキへの植え替え事業を展開している。真田さんは「あきる野市小和田の広徳寺がいい例」と説明。ただ、「伐採したり植えたりする職人の高齢化で山は衰退しており、その技術を継承していくのが難しくなっている」と指摘した。

真田さんは「森林はさまざまな生態系をつくる基盤であり、きれいな水をつくり二酸化炭素を吸収し酸素を供給するほか、美しい自然の景観を形成する。人々の生活にも多様な恩恵をもたらす貴重な自然環境なのでボランティアも含めて多くの市民参加で森を再生していこう」と参加者に呼び掛けた。

参加者はヘルメットとノコギリで身支度をして山に入り、間伐作業を行った＝写真上。あきる野市瀬戸岡から初めて参加した田中智大さんは「市のチェーンソー講座に出て、子どもの頃、山で木を切って遊んだことを思い出して面白くなった。これからは森の再生に向けてボランティア活動をしていきたい」と話していた。

西多摩新聞　2013年（平成25年）3月22日（金曜日）